短期派遣 EUROPA 派遣報告書

１）氏名
　小久保真理江

２）派遣先
ヒルデスハイム大学（ドイツ）

３）派遣期間
平成 24 年 11 月 20 日～平成 24 年 11 月 26 日

４）派遣の概要
　2012 年 11 月 22 日から 24 日にかけてヒルデスハイム大学で開かれた第二回 ITP 国際セミナーに参加するため、11 月 20 日から 26 日にかけてドイツに渡航した。
　セミナー第一日目は夕方からバスで会場へと移動し、比較文学研究者レモ・チェゼラーニ先生の講演を拝聴した。チェゼラーニ先生からは以前よりその著書や講演を通して文学研究の面で影響を受けてきたが、今回はヨーロッパの様々な政治体制やアイデンティティーの問題についてのお話から新たな刺激を受けることができた。
　二日目は午前午後ともセミナーが開かれた。午前は文化政策をめぐる発表やパネルディスカッションで、「文化」や「伝統」という概念についての時代や地域による文脈の違いについて改めて考えさせられた。
　二日目の午後は二つのパネルが同時進行で開かれた。私は「イタリア・日本・ドイツにおける文学・映画・演劇」というパネルに参加し、「チェーザレ・パヴェーゼの映画論（Saggi cinematografici di Cesare Pavese）」という題の研究発表を行った。この発表は、共同論文指導制度に則りボローニャ大学で執筆した博士論文をもとに準備したものである。具体的にはイタリア２０世紀の作家チェーザレ・パヴェーゼの映画評論を分析し、その映画観について当時の文化状況をふまえながら論じた。研究発表はイタリア語で行ったが、パワーポイント資料に英語の説明を併記した他、発表原稿の英語訳も会場で配布した。発表後は英語で質疑応答が行われた。本学の和田忠彦教授とともに司会を務めたヒルデスハイム大学のシュナイダー教授から、イタリアにおける芸術と民衆の関係について具体的な質問とコメントをいただいた。
　午後のセミナー終了後は、学生たちの案内によるキャンパスツアーが行われた。大学の校舎をめぐるとともに、映画や音楽など様々な領域の芸術を学ぶ生徒たちのパフォーマンスを見ることにより、ヒルデスハイム大学の雰囲気を体感することができた。
　セミナー最終日の三日目も二つのパネルが同時進行で開催された。両方のパネルに関心があり、どちらに参加すべきか最後まで迷ったが、結局は現在の自身の研究内容との関連性等を考慮して哲学・歴史学のセミナーに参加した。発表言語のフランス語やドイツ語について十分な知識は持ち合わせていなかったものの、英語での補足説明やパワーポイント資料によって概要を理解することはできた。その後の質疑応答も、司会の先生が英語で内容を要約して下さったため大部分理解できた。

最終日の午後は世界の様々な地域の楽器を展示する「世界音楽センター」に案内していただいた後、文化ツアーに参加し、ヒルデスハイムの複数の重要な歴史的建造物を見て回った。中世の衣装を身にまとった案内役の方々の説明を聞きながら街を散策することにより、短い滞在期間ではあったが、ヒルデスハイムという街の歴史にも触れることができた。

５）派遣の成果

今回の短期派遣の成果としてはまず、これまで ITP の支援のもとで進めてきた研究の結果をドイツという新たな場所で発表できたことが挙げられる。以前にイタリアやアメリカの学会やセミナーに参加したことはあったが、ドイツで研究発表を行うのは全く初めての体験であった。特に今回は様々な言語や分野の研究者が集う場での発表であったため、専門知識を共有しない人々にも内容が伝わるよう工夫する必要があった。こうした場で限られた時間のなか研究の重点を分かりやすく伝えることは決して容易ではないが、聴衆や時間制限に合わせて内容を練り直すことにより、研究対象を新鮮な目で見直すことができるということを実感した。

また、様々な領域の研究者が集うセミナーに参加したことの成果としては、他の参加者の発表を聞いて知識や視野を広げることができたということも挙げられる。特に今回は文化という概念をめぐる議論や芸術と民衆との関係についてドイツの文脈を知ることができたのが有益であった。これまで自らの研究においても芸術と民衆との関係には強い関心を寄せてきたが、ドイツなどイタリア以外の国における議論については知識が乏しかった。ヨーロッパの近隣の国における議論や文脈を知ることは、専門分野であるイタリアの文化状況を俯瞰的に理解するためにも非常に重要であるということを改めて実感した。専門分野の異なる研究者と個々の研究テーマについて直に活発な議論を行うことはなかなか難しいが、長期的な目で見ると、こうした領域横断的なセミナーに参加することは、これから広い視野で研究を進めていくために非常に有益な経験であると思う。

６）今後の課題

今後の主要な課題は、これまでの博士課程での研究成果を基盤に新たな研究を進めていくことである。具体的には、パヴェーゼと同時代の他の作家とアメリカ文化との関わりについて研究したいと考えている。また、博士課程での研究成果や今後の新たな研究成果を国内外の様々な場で発信していくことも今後の重要な課題である。今回の経験を活かし、イタリア研究者に限らない様々な分野・言語の研究者が集まる国際研究集会にも積極的に参加していきたい。そのためにもイタリア以外の国の歴史や文化についての知識を深めていきたいと考えている。また、こうした他分野の研究者との交流を通して得た新たな視点を自らの研究に活かしていくことも今後の大きな課題である。